行　政　視　察　報　告　書

教育民生委員会 行政視察		平成３０年７月２５日（水）～７月２７日（金）
視 察 先 及び 調査事項	三鷹市	⑴　コミュニティ・スクールを基盤とした小・中一貫教育について
	川崎市	⑴　川崎市子ども夢パークについて ⑵　かわさき宙と緑の科学館について
	足立区	(1)　子どもの貧困対策について

コミュニティ・スクールを基盤とした小・中一貫教育について

三鷹市　７月２５日（水）13：30～15：30

概要

「不登校をなくしたい」帰りがけに、清原慶子三鷹市長が、突如バスに乗り込み「今日の視察はコミュニティースクールと聞きましたので、突然ですがお邪魔します」と言い、冒頭の「不登校をなくしたい」と熱く語ってくれました。

平成１５年４月、初当選の清原市長が「三鷹市小・中一貫教育校基本計画検討委員会」設置し、検討を始めましたが、保護者や地域住民の理解が得られず、平成１６年１月にいったん白紙となるが、組織を改正し、アンケートや懇談会、講演会等を行い、平成１７年３月「三鷹市小・中一貫教育校構想に関する基本方針」４月に「三鷹市小・中一貫教育校開設準備委員会」に、学校運営部会、カリキュラム部会、コミュニティースクール部会を設置、９月に検討報告がなされ「三鷹市小・中一貫教育校の開設に関する実施方法」が確定され、平成１８年２月に「三鷹市小・中一貫教育校「にしみたか学園」」が告示され、４月に開園となった。

その後、平成２１年９月までに、小学校１５校、中学校７校を一貫校として、７学園を開設した。

教育理念は、質の高い教育をどの学校においても保障する（義務教育９年間に責任を持つ）。地域全体で共に子供を育てる。ただし、学校自由選択制は実施しない。としている。

三鷹市自治基本条例、第３３条には、参加及び協働として、保護者、地域住民等の学校運営への参加を進めることにより、地域の力を活かし、創意工夫と特色ある学校づくりを行う。

学校を核としたコミュニティーづくりを進める。とある。

コミュニティースクールとしては、保護者や地域住民が、教育委員会や校長に意

見を述べたり、教職員の任用に意見を述べたり、校長の学校運営基本方針を承認する「学校運営協議会」を設置して、全住民の目で学校を見守れる姿勢を市域に「子供は宝」を知らしめている。

また、校外学習や、調理、パソコン、九九、書写等には、地域の皆さんに教育ボランティアとして関わってもらっている。

先生も、東京都教育委員会発令の小中教員の兼務発令がなされ「１５歳の姿」を三鷹市全域で責任を持つ姿となっている。

考察

今、どの地域でも、地域が子供を育てると銘打った施策が行われているが、兼務発令、学校運営協議会、教育ボランティア等の大人が、市域の子供たちと多くの接点を持てることで「私は、僕は守られている」と感じられる、小中一貫校の有り方は、いじめや、不登校に大きな意義を見出していると思う。

９年間の歳月が、円滑な接続によって成長する事が、「１５歳の姿」を幸せな姿として迎えられることは、生涯において素晴らしい情操となると感じた。

川崎市子ども夢パークについて

川崎市　７月２６日（木）10：30～12：00

概要

川崎市子ども夢パークは２００１年４月施行の「川崎市子どもの権利に関する条例」を実現する施設である。

安心して生きる、ありのままの自分でいる、自分を守り守られる、自分を豊かにし力づけられる、自分で決める、参加する、個別の必要に応じて支援を受けられる等の権利が、子どもの、人間としての大切な権利として目指すべき指標としている。

また、条文上２７条の子どもの居場所、３１条、３４条の参加活動の拠点づくりに根拠規定がある。

夢パークの基本理念、子どもの自由な発想で、遊び、学び、つくり続ける居場所として、７項目をうた、子どもの自主的運営を目指している。

この施設は、２００３年７月に開園され、２００６年４月から指定管理者「川崎市子ども夢パーク共同運営事業体」で、公益財団法人川崎市生涯学習財団と特定非営利活動法人フリースペースたまりばが、一期５年間で受託し、現在３期目の管理運営を行っている。

休所日は第３火曜日と年末年始で、開所時間は、午前９時から午後９時である。

敷地約１ヘクタールに、約２、０００㎡の建物がある。

建物は、安全に使用できる基本的なものが整備され、他は、考え、つくり、壊す、考えといった繰り返しで、増築改装等の多様性、可変性も視野に入れている。

支援は、子ども夢パーク運営準備会の公募市民や、利用者懇談会のつくりつづける会、親子でもっとあそぼう会が支援をしている。

不登校児童生徒の居場所が平成１３年に開設され、平成２８年に文科省通知で、不登校を問題行動としてはならないとの方針によって、特定非営利活動法人フリースペースたまりばが、安心して過ごせる、学び・育ち支援や、保護者支援等を、月から金曜日 10：30～18：00 までの間、所長１、副所長２とスタッフ、計１８名に、アルバイトやボランティアで、フリースペースえんを運営している。

考察

平成２８年虐待相談１２万件余、不登校１３万人余、ひきこもり５４万人余、８０５０親子のひきこもりが問題化、小学生暴力２万件余、中学生暴力６万件弱、小中高のいじめ３２万件余、内小学二年生のいじめ２３万件余、大学生までの自殺８１７人、問題として、DV 家族は、住民票からの統計が無く、数字はもっと増えると思う。

問題解決は、格差拡大による、施しではストレスがたまり、自己肯定感が希薄になり、子どもへの評価が親の評価に結びつき、正しい親に見られたいという親の不安は、子どもの不安となり、更に自己肯定感を子どもから奪ってしまう。

過去、親は、生産活動が忙しかったが、祖父祖母が、自分の孫や、よその孫の、子育てを賄い、穏やかな地域が育まれていた。

そして、子どもの様子から、いじめ等の異変を見つけ早期に対応して来ていた。

ただ甘える、ただ甘えさせる「無償の愛」の環境が、必要な事だと思った。

子どもの貧困対策について

足立区　７月２６日（木）14：30～16：00

概要

子どもの貧困対策を健康と教育の観点から検討した。

様々な比較データから、子どもの家庭環境、生活習慣を変えることによって、健康になり、学力向上が見られる。

従って、保護者への相談支援や、地域行事への参加によって、つながり体験や経験を増やす施策を充実させることが必要である。

考察

子どもの貧困は、親の経済活動に左右され、生活保護では、親の自尊心や、子ど

もの自尊心もあり、保護だけでは賄いきれない面が多々あり、貧困は、格差のどこが耐えられるボーダーラインなのかは、現在の経済状況では特定できず、生活保護では賄えず、やる気を出させる方法を見つけなければならないと思う。

昔、額に汗して働けば、何とかなる。と言った生活が、自尊心と食べる事のボーダーラインだったと思えば、税金による需要の掘り起こしによる政策が最も必要ではないかと感ずる。

かわさき宙と緑の科学館について

川崎市　７月２７日（木）10：30～12：45

２０１９年５０周年を迎える、かわさき宙と緑の科学館は、年間２９万人の来場者を数える施設である。

市民や学校教育との連携で、市民に開かれた博物館としての歩みを継承しながら、天文、自然を体験と知識で本質を探究する科学として推進する事で、世界に目を向けて貢献できる人材を育み、その人々を繋ぎ、個性と魅力あふれる街づくりに寄与する事を基本理念としている。

川崎市出身の、プラネタリウムクリエイター大平先生や藤島先生の光触媒等の科学を中心にした、科学館を、科学や自然課題を自主的に利用できるよう様々なプログラムがある。

考察

旅等で訪れたその地域の特色は、博物館に寄って確認し、そこを彷徨うのが旅の醍醐味であり、自主的な旅になると思うところに、更に科学の力で更なる醍醐味を感じさせる施設づくりだと思う。

この科学館は、郷里の先人の偉業を確認しつつ、ややもすれば、科学が自然を云々という最悪の状態になる事を、科学による自然との営み、自然と科学の融合にまで昇華させ、より良い生活はこうすればということを学べるのではないかと感じられる施設である。

平成３０年８月６日

松本市議会議長　上　條　俊　道　様

委　員　太　田　更　三